

萩にあしあと残そうよ

「新型コロナウイルス感染拡大」

令和2年(2020)
4月1日発行
—第5号—



指月公園（萩城跡）にある桜
日本で唯一のミドリヨシノ

「日々の暮らし」

春分も過ぎて、ぐっと日が長くなり、暖房や厚着が不要の日が多くなりました。また、あちこちで様々な花を目にするようになって、四季が一巡したことを実感しています。しかし、新型コロナウイルスの感染予防対策で、行事の中止や公共施設の閉鎖などがあり、なかなか思いどおりに過ごすことができないのは残念でもあります。一日でも早い収束を願いつつ、体調管理をしっかりとやっていきます。

「あしあとノート」

◆秋吉台の山焼き◆

美祢市で春の風物詩「秋吉台の山焼き」が、二月二三日に実施されました。直後の景色を見たかったので、一週間後に車を走らせて行ってきました。焦げたにおいの残る広大な景観に感動しました。



黒焦げの大地の色と、白い石灰岩とのコントラスト。

◆行事が次々に中止◆

参加等を予定していた行事が、次々に中止となりました。

- ・一日：秋吉台のマラソン
- ・八日：真ふぐ祭り
- ・一五日：しろ魚まつり
- ・二一日：萩往還ウォーク

◆献血協力◆

輸血用の血液が足りないというニュースを耳にし、インターネットで調べたところ、萩市に献血車が来るという情報を得ました。健康な自分ができる、ささやかなボランティアということで、四〇〇円献血をしました。

◆柿本人麿生誕地へ◆

今から約一三〇〇年前、天武・持統・文武の三天皇に仕えた宮廷歌人で、万葉集に数多くの長歌・短歌を遺している柿本人麿（人麻呂）。島根県益田市に生誕地があり訪ねました。碑の後方には御廟所（遺髪塚）もあり、人麿の遺髪が埋葬されていると言い伝えられているそうです。また、近くには戸田柿本神社もあり、参拝することができました。



歌人斎藤茂吉もこの場所を訪ねたかもしれません。

◆岩国錦帯橋の桜◆

迷いましたが今年の桜を見にドライブしてきました。



少し早いながら川瀬巴水が描いた景色が見られました。

「自由気ままな歌日記」

一手にて

オセロが白に変わるように
予定が消えた肺炎の波
(二月二七日)

牛乳の容器彩る雪消えて
名橋に咲く桜となりぬ
(三月五日)

雨上がり待って走れば
東光寺にヨウコウザクラ
門を彩る
(三月一四日)

鳥啼くを聴きて
郷愁極まれり
かの山谷を思い出づれば
(三月二四日)

「仕事はどうだい？」

新型コロナウイルスの感染拡大の影響は、私の仕事にももちろん及んでいます。不安を述べれば、県内各地を営業で回るため不特定の人々との接点が多いことや、得意先の客数や売上が減少し、当社の商品も売れないことです。そして、みなさん同じだと思いますが、先行きが見えないことへの不安がもっとも大きいです。

写真は、得意先にお渡しした販売促進用の掲示物です。少しでも目に触れて、手に取っていただけるよう工夫したいと思っていますのですが、なかなか難しいものです。



私の代わりにお客さんに
アピールしてくれ！

部署は異なりますが、四月には新人が数名入社します。私ももうすぐ二年生。

「ま・な・び」の記録

『古地図を片手に、

ぶらり萩あるき』

萩城三の丸Aコース

広報はぎに掲載されていた市民モニターツアーに申し込んで参加しました。まずはガイドを務める人々の紹介を。

◆チーム歩偶見（あすみ）

名称の由来は、歩きながら隅々まで見ましようという意味。平成二九年（二〇一七）九月に活動を開始しました。山口県の呼びかけで「古地図を片手に、まちを歩こう。」というガイドツアーの取り組みを、県内二八コースでスタートしたのがきっかけです。チーム歩偶見は約十人のメンバーで活動しており、今回初めて市民向けのモニターツアーを企画したということです。

* * *

三月二八日、午後一時三〇分の出発時には、天気予報どおり雨が降り、気温も十度前後と肌寒い中、傘をさしての散策となりました。



ガイドの植木さん

◆城下町が残っている理由

江戸時代の萩城下の町割り現在に残っているのはなぜなのでしょう？その主な理由は四つあります。

◎三角州だったから

関ヶ原の合戦で徳川に敗れた毛利氏が萩に入り、干拓を進めながら城下町を作りましたが、三角州は上流部と海岸に近い部分は盛り上がり、中央部は低湿地でした。このため、中央部には農地や蓮田が広がり、大雨の時の遊水池の役割を担いました。時が流れて市役所など行政機関やショッピングセンターなどが中央部分に整備されたため、古い町並みは区画整理されることなく残されました。

◎夏みかんがあつたから

萩で夏みかんの栽培が始まったのは明治時代ですが、以

降昭和四〇年代までまさに主要産業として萩の経済を支えてきました。もともと困窮した土族の救済を目的に栽培されるようになったことから、武家屋敷地は夏みかん畑として活用されました。そして、長屋や土堀が風よけの役割を果たしていたことから壊されずに残ったことで、区割りがほとんど変わることがありませんでした。

◎鉄道が通らなかつたから

大正一四年（一九二五）に山陰本線が整備されるにあたり、二年前に萩町と合併した三か村に駅を配置することとなりました。これにより、鉄道は三角州の外側を通ることとなり、城下町が破壊されることがなかったのです。

◎空爆を受けなかつたから

太平洋戦争の末期、日本各地の都市は空襲を受け焼かれました。萩も空襲の候補地として一五七番目にリストアップされていましたが、終戦を迎えて空爆を免れました。このため、多くの木造建築物が今に残ったのです。

↓こんな場所を歩いたよ！

◆平安橋（へいあんばし）



橋桁 6.04m、幅 3.95m
好きな場所のひとつです

萩城の三つの入口のひとつ平安古（ひやこ）の総門前の外堀に架けられたものです。明和年間（一七六四〜七二）に造られたものと推測されます。吊り桁・定着桁を備えた構造の無橋脚の珍しい橋で、自動車が行く今も現役の橋として利用されています。

◆ひかりつけ工法



柱や土台を基礎の石の
凸凹の形に合わせる技法

◆様々な時代が混在

下の段は江戸時代築と思われる、その上に積み直したり積み増したりして、あたかも歴史年表を見ているかのよう。



積み方で、そこに何があったかを推測するそうです

◆敷石のモニュメント？

萩西中学校に残された右側の石のライン。参勤交代の行列が通った御成道の幅を伝えるため、学校敷地内に当時の道の基礎石をあえて残しているのだそうです。道幅は五間（約十m）ありました。



このような遺構は教えてもらわないと気づかないもの